特別記事

小・中学校や地域と連携し、教育資源や人的資源を還元

～明海大学 高野 敬三 副学長に聞く～

明海大学の「地域学校教育センター」は、浦安キャンパスが位置する千葉県浦安市をはじめ、千葉県内や東京都内の小・中・高等学校および教育委員会、地域社会と連携し、教育研究の成果を還元するため、2016年4月に設立された。2017年1月には、東京都足立区内の小・中学生の学力向上、英語力向上を目的とした連携協力協定を締結した。足立区をはじめとする地域連携のねらいや現状の取り組み、今後の展望について、高野敬三副学長にお話を伺った。

教育資源を還元して地域に貢献

「知」の拠点である大学では、さまざまな分野の教育研究が行われ、昨今では社会からの要請によるグローバル人材の育成という使命に応えるべく、国際化への取り組みが加速している。また、地域社会への貢献といった新たな動きも広がりを見せている。明海大学においても、地域に大学の教育資源を還元すべく、2016年4月、「地域学校教育センター」を設置し、千葉県内や東京都内の小・中・高等学校および教育委員会、地域社会との連携を進めている。

例えば、これまですでに、東京都立高校に在籍する外国籍生徒に対して、「日本語教育」の支援や同大留学生との交流会を開催したほか、千葉県浦安市の小学校で児童の学習支援や、英語および外国語活動に関する支援、都立高校英語補習寺子屋事業支援などを行ってきた。

地域学校教育センター長と教職課程センター長を兼務する高野副学長は、「本学の教職課程の教員や学生、そして留学生等が、各地域の子供たちの支援に動いています。本学における学びを、実際の現場に生かす取り組みと言えます。大学にとっては、教育資源の還元を通じて地域への貢献ができ、地域にとっては、大学の知見を生かして支援を受け、子供たちの学力が向上する、という双方にとって良い関係を築くことができています」と話す。

足立区からの要請に明海大学が応じて実現

2017年1月には、東京都足立区と「連携協力に関する協定」が締結された。2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催や小学校英語の必修化、教科化への対応を見据え、区内の児童生徒の英語基礎力の定着と向上、グローバル人材の育成に向けた、区の英語・外国語活動の施策・事業の充実を図ることを目的としている。

高野 啓三（たかの・けいぞう）

明海大学副学長。同大地域学校教育センター長、教育課程センター長を兼務。東京都立高等学校で教鞭を執り、東京都教育委員会指導主事、都教育委員会高等学校指導課長を経て、東京都立飛鳥高等学校校長。その後、東京都教育委員会指導部長、都教育委員会理事、東京都教職員研修センター所長を歴任し、2013年より東京都教育監、2015年3月定年退職。2015年4月より明海大学外国語学部教授。2016年4月より現職。文部科学省「不登校に関する調査研究協力者会議」委員、「教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討委員会」委員、中央教育審議会初等中等教育分科会教員養成部会」委員を歴任。

今回の連携協定事業の背景について、高野副学長は「足立区の中学生の英語力は都内でもあまり高いとは言えず、学力調査でも、英語で目標点数を超える生徒の割合が、他教科に比べると低い傾向があるようです。そこで、区内の中学生の英語力向上を図りたい、との足立区からの要請を受けて、本学が大学改革を進めるうえで、足立区と連携することで、教育資源を地域に還元し、貢献することにつながると考えました」と説明する。そして、「足立区の子供たちが英語を好きになり、英語を学ぶことを楽しいと思えるような状況になるまで、本学の教員が各校を訪問して英語教育に携わり、授業改善に取り組む先生方を支援していきたいと考えています」と述べた。

連携協定事業は、「児童生徒の英語基礎力の向上」「小・中教員の授業力の向上」「区民の外国語学習活動支援」を柱とする。中学校への支援としては、重点支援校に指定された区内の5つの中学校に対し、同大の担当者が月2回訪問し、各校が定めたテーマに沿って、区教育委員会指導主事とともに、助言を行っている。また、2016年度に実施して評価の高かった、区内中学生と同大留学生による交流事業を継続して行っている。

「このような交流事業や学習支援事業は、本学の教職課程の学生にとっては、教育実習に加えて学校現場を体験する機会となり、足立区と本学の双方にとって有益であると言えます」と高野副学長は話す。

小学校に対しては、小中連携対象校、足立区小学校教育研究会外国語活動部顧問校長校、校長会長校の全7校において、英語の授業をより充実させるための指導助言を継続的に行っている。

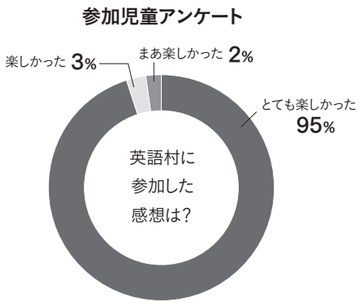
また、2017年度はこのような児童生徒や教員への支援に加え、区民の外国語学習活動の支援も徐々に広げており、「外国人おもてなし語学ボランティア・ブラッシュアップ講座」や「小・中学校の英語教材で学ぶ大人の初級英会話講座」「親子で学ぶ楽しい日本語講座」といった講座を開講してきた。

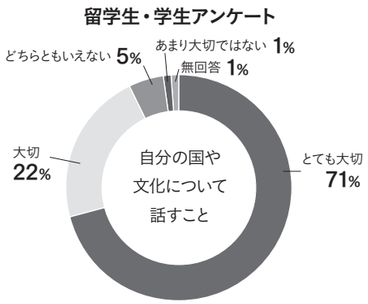
「留学生」という人材資源を生かして貢献

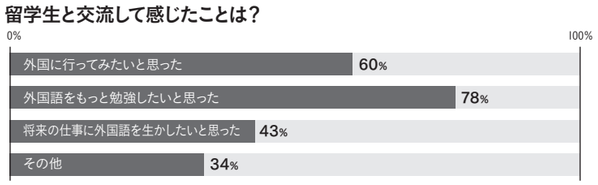
このような事業を進めるなかで、2017年11月には、足立区の小学生約90名が同大を訪問し、留学生や教職課程の学生と英語で交流する「明海大学あけみ英語村～小学生異文化交流プロジェクト～」を開催した。これは、教室で学んだ英語を実際に活用することで、英語でコミュニケーションを図る喜びを体感し、異文化を体験することを目的としたものだ。

「子供たちは、欧米の英語圏だけではない国々から来た留学生と接することができます。世界には多様な国籍の人がいて、英語は世界の人々と交流するための共通言語なのだと知ることは、コミュニケーションの喜びを知り、英語や言語に対する意識を高めることにつながります」と話す高野副学長。そして、「本学には

4,000名の学生のうち、留学生が500名以上も在籍しています。その人的資源を有効に活用したいと考えています。子供たちにとっては、世界の人と接し、世界へ目を向けるきっかけになりますし、留学生にとっては、日本の子供たちと接して、自国の文化や言葉を紹介したり、日本の文化や言葉に触れたりする機会にもなります」と、双方向のコミュニケーションによる効果を述べた。







小学生も留学生、学生も満足した交流の機会

今回の英語村事業では、カナダやウズベキスタン、ベトナムなど16の国と地域からの留学生が参加した。また、教職課程の学生も小学生のサポートに入り、自らの教育観を育む機会となった。開催に向けて同大では、留学生と学生、教職員が一丸となって準備を進め、当日のプログラムは同大と区教育委員会、小学校の三者で事前協議を繰り返し、練り上げてきたという。当日は、留学生、学生、教職員が笑顔で小学生を迎え入れ、体育館や芝生広場、教室など学内のさまざまな施設で交流を深めた。

高野副学長は「子供たちとの交流には『遊び』が必要とのことから、遊びを通して英語を話す空気づくりをしようと、ランチタイムには芝生広場で昼食をとり、小学生が用意してきた遊びを取り入れながら交流を深めてもらいました。芝生広場という開放的な空間だったこともあって、子供たちもリラックスして英語を使って交流していました。プログラムが終了して、バスに乗り込む際には、子供たちも満足した笑顔を見せ、学生や教職員とハイタッチして帰っていく姿も見られました」と喜ぶ。

実際に、参加した小学生へのアンケートからは、「とても楽しかった」「楽しかった」が98%と、ほぼ全員が肯定的な感想を寄せ、「外国に行ってみたいと思った」「外国語をもっと勉強したいと思った」「将来の仕事に外国語を生かしたいと思った」などの声が挙がっている。事業のねらいの通り、小学生は今回の体験を通じて、英語への意識と英語学習への意欲を高めていたことが分かる。

また、留学生や教職課程の学生へのアンケートでは、「小学生にとって自分の国や文化について人に話すことは、大切なことだと思う」という回答が9割を超えていた。また、「小学校の教員免許を取ることも視野に入れたい」といった声も寄せられている。

このアンケート結果について、高野副学長は「小学生にとっても、本学の留学生や学生にとっても、今回の英語村事業を意義深く感じてもらえたようです。双方にとって、他国の文化や歴史、良さに気付き、自分とは異なる文化を受け入れ、尊重することの大切さを体感できる機会になりました。こうした事業は今後も継続的に行っていきたいと考えています」と述べた。

2020年以降も継続するレガシーとして

「明海大学あけみ英語村」の事業については、今後、対象学年に応じたプログラムを開発することや、留学生や教職課程の学生の人数をいかに確保するか、開催曜日を日曜にする方が参加者を確保できるか、などの検討すべき課題はまだある。また、今回ほど大きい規模ではなくとも、夏休みなどに簡易に開催できる交流会形式にするなどの要望もあるという。さらに、会場を同大とはせず、各小学校へ留学生が出向いて交流会を開くことも考えられる。

同大はこれからも、足立区との連携協定事業のさらなる発展を図る。小・中学生の英語力向上のための取り組みや、教員の指導力向上のための助言、区内中学生への学習実態調査などを行い、双方にとって効果的な方法を見出したいと考える高野副学長。2020年からの新学習指導要領実施、東京オリンピック・パラリンピック開催に向けて動き出した足立区とともに、同大は歩み続ける。「連携協定事業はまだ始まったばかりですが、2020年がゴールではなく、2020年以降も“レガシー”として継続していく事業として、教職員と学生が一丸となって取り組んでいきます」と力強く語った。

EVENT REPORT

「明海大学あけみ英語村　小学生異文化交流プロジェクト」が開催

昨年度より始まった、明海大学と足立区の連携協定事業。今年度は小学生を対象にした「英語村」で、各国からの留学生と児童が英語を使って楽しみながら交流した。

2017年11月2日。明海大学新浦安キャンパスを足立区立西新井小学校の5年生87名が訪れ、同大学の外国人留学生と英語で交流する「明海大学あけみ英語村 小学生異文化交流プロジェクト」に参加した。

開村式では、明海大学の安井利一学長が「明海大学には世界各国からの留学生が500名以上いる。彼らと一緒に楽しい一日を過ごし、学んでほしい」とあいさつ。緊張で固まっていた子供たちだが、アイスブレイクでは、外国人留学生と日本人学生約80名とともに“Rock, Paper, Scissors, One Two Three!”と「じゃんけん列車」を楽しんだ。少人数のグループに分かれたあとは、英語で自己紹介。“Hello! My name is ...” “Nice to meet you!” “I like ...”さらに、それぞれの国の言葉であいさつをし、お互いの名前を英語で言い合うなどして、子供たちは徐々に強張りを解いていった。

グループごとにキャンパス内の芝生の広場で昼食を取ったあとは、鬼ごっこやだるまさんがころんだ、バドミントン、剣道など、遊びを通した交流がなされた。留学生や日本人学生たちが会話をリードし、子供たちも遊びやゲームの解説をするなど、相互にコミュニケーションを図りながら打ち解けた様子が見られた。

「学んだ英語で伝えたい、話したいと思っても、なかなか普段、動機付けの場がないので、このような機会はありがたい」と5年生の担任の轟木陽子先生は話す。

午後は、アクティビティ・スタート・セレモニーから開始。足立区の石川義夫副区長が「楽しく学び、遊んだ体験を足立区に持ち帰って、これからの学習に役立ててほしい」とあいさつした。

子供たちは「ネイティブ授業」「各国遊び」「読み聞かせ＆アクトアウト」の3つのアクティビティを体験。「ネイティブ授業」では、ネイティブの教師が英語で授業を展開した。英語でのあいさつと自己紹介のあと、アメリカとカナダの伝統行事であるサンクスギビングを紹介。児童は色や形を英語で復唱しながら、真剣な表情で七面鳥のペーパークラフトを作っていた。

「各国遊び」では、留学生たちの母国の遊びを体験。体育館に足を踏み入れると、子供たちの笑い声と笑顔が弾ける。ベトナムの「ダーカウ」は、重りの付いた羽根を足で蹴り渡していく、日本の蹴鞠（けまり）にも似た遊びだ。サッカーを習っている男児はリフティングの要領で、器用に羽根を受け止めていた。ほかにも、マレーシアの足踏みゲーム「ペプシコーラ」、韓国の「投壺（とうこ）」、パキスタンの「サッチェ・ラブレ」、ウズベキスタンのサイコロゲームなど、大人でも初めて見る遊びばかり。子供たちもまずはルールの理解が必要だったが、すぐになじみ、世界の遊びを身体で感じていた。

「読み聞かせ＆アクトアウト」では、留学生2名と日本人学生1名のチームで、「浦島太郎」「3匹の子豚」「赤ずきん」など子供たちになじみのある絵本を英語で読み聞かせる。擬音やあいさつなど、それぞれの国の言葉で実演。例えば、“Splash!”は日本語では「ポチャン」、ネパール語では「チョプラーン」、ベトナムでは「トン」といった具合に、国による表現の違いを楽しんだ。

一日を終え、すっかりリラックスした雰囲気の子供たちは「最初は緊張したけれど、いろいろな国の遊びでほぐれた。英語は全然できなかったけれど楽しかった」「留学生にいろいろと教えてもらい、英語の勉強にもなった。英語で好きな剣道のことなどを話した」と口々に感想を述べていた。

西新井小学校の柴良之校長は「留学生との交流を通して、その背後にある『世界』を意識し、心に留め、自分のなかで深めていけるといい。将来、英語を使った仕事に就くなど、今日のことが人生の大きな転機となる人がいるかもしれない」と子供たちに語り掛けた。